

## 第18回世界社会学会議

2014年7月13日～19日にかけて国際社会学会（International Sociological Association: ISA）の第18回世界社会学会議（XVIII ISA World Congress of Sociology）がパシフィコ横浜で開催された。世界社会学会議は4年毎に開催される社会学界最大の研究集会で、東アジアでの開催は今回が初めてである。ISA 創立の1949年からメンバーである日本社会学会にとって、世界社会学会議の日本開催は1960年代後半からの懸案であり、過去にも何度となくISA 側から要請を受け、日本社会学会の理事会で可能性が探られていた。今回の日本開催に関しては2005年から小委員会を立ち上げるなどの準備を重ね、2008年3月のISA 理事会で、トロント・横浜・サラゴサ（スペイン）がプレゼンテーションを行い、満場一致で2014年の世界社会学会議の横浜開催が決定したとのことである。（開催までの道のりについては、<http://www.wcs2014.net/content/history> に詳しい。）

国際社会学会は、国別の社会学会評議会と研究領域ごとのリサーチ・コミッティ（Research Committee: RC, 2014年7月現在55グループ）から構成されている。それに加えRCの前段階と位置づけられるワーキング・グループ（Working Group: WG, 現在4グループ）やテーマグループ（Thematic Group: TG, 現在4グループ）がある。大会ではRCやWGに所属する会員数によって部屋の大きさやセッション数が割り当てられる。横浜大会での報告者は参加費用（5万円前後）を払うが、ISAの会員になる必要はなかった。ただし報告するセッションによっては、それを組織しているRCの会員になることが義務づけられる場合もあった。

本大会のテーマはFacing an Unequal World: Challenges for Global Sociologyで、プレジデンシャル・セッションや連日のプレナリー・セッションで多方面から不平等の問題が取り上げられていた。筆者は主にRC06 Family Research（家族研究）やRC32 Women in Society（社会における女性）の組織するセッションに出ていたが、全般にフレンドリーな雰囲気で見聞交換が行われていた。

筆者は香港の研究者と共同で、RC32（Women in Society）でセッションをオーガナイズした。報告者募集から最終的なプログラム決定に至るまでのオーガナイザーへの指示は、比較的きちんとしたもので、進めやすかった。当セッションには多くの報告申し込みがあり、うれしい悲鳴ではあったが、110分で報告できる数は限られているため、選考を行う必要が生じた。その過程でプログラム・コーディネーターから適切な数の口頭報告に加え、distributed papers（当日はセッションに出席し、ペーパーを配布する形で報告）の枠を必ず設けるようにとの指示があった。国際学会であることや、参加費が高額であることで、報告がアクセプトされても登録しなかったり、登録しても来なかったりすることが見込まれるため、口頭報告のロットに空きがでたら、これらの人が登壇する、という仕組みになっているとのことであった。オーガナイザーとしては、万が一来られない人が続出した場合の不安は解消されたものの、プログラムに掲載され、実際に会場に来ている「報告者」の中に、登壇する人とならない人がいるという違和感は拭いきれなかった。筆者が参加した他のセッションでは、報告予定の5名中3名のみが会場に来たが、各報告に時間をかけ、質問やディスカッションの時間をたっぷりとり、結果的に議論を深めることができているものもあったので、本人が希望するならともかく、distributed papersの枠を設けることについては、疑問を持っている。

大会プログラムは500頁、アブストラクト集は1,000頁を超えるほど規模が大きいので、事前にすべてを確認することができず、終わってから聞きたかった報告を見ついたり、知り合いが来ていたことを発見したりする始末であったが、個人的には、日本にいながら国際会議の雰囲気を満喫することができ、その中で新しい出会いがあり、思わぬ人との再会もあり、研究を続けていく意欲を駆り立ててくれた大会であった。

本大会には104の国・地域から6,000人を超える参加者があり盛會に終わった。100人以上の参加者

があったのは、日本 986, アメリカ 599, ドイツ 408, イギリス 317, フランス 266, オーストラリア 251, ブラジル 228, インド 189, カナダ 187, ロシア 169, メキシコ 144, スウェーデン 140, オランダ 128, イタリア 128, 韓国 127, 台湾 125, 中国 124, スペイン 121である。RC別の登録参加者が200人以上であったものは、多い順から、社会における女性 (RC32 Women in Society 328人), 教育社会学 (RC04 Sociology of Education 316人), 家族研究 (RC06 Family Research 289人), 環境と社会 (RC24 Environment and Society 264人), 地域・都市開発 (RC21 Regional and Urban Development 245人), 健康の社会学 (RC15 Sociology of Health 243人), 経済と社会 (RC02 Economy and Society 240人), 移動の社会学 (RC31 Sociology of Migration 237人), 貧困, 社会福祉, 社会政策 (RC19 Poverty, Social Welfare and Social Policy 221人), 人種差別, ナショナリズムと民族関係 (RC05 Racism, Nationalism and Ethnic Relations 216人), 若者の社会学 (RC34 Sociology of Youth 208人), エイジングの社会学 (RC11 Sociology of Aging 206人) である。登録参加者が100人台のRCも20以上あり, その一つが人口の社会学 (RC41 Sociology of Population) で, 127人であった。多くの制約のある中で長期に渡る綿密な計画を練り, 滞りなく本大会を閉会まで導いた関連者の方々に敬意を示したい。次回の大会は, 2018年, トロントで開催予定である。

なお, 最後になったが本研究所からも5名が参加し, 以下の報告を行った (括弧内は報告したセッション名)。

- Yu KOREKAWA "Immigrant Occupational Attainment in Japan and its Determinants: Is it a 'Structured Settlement?' " (RC31 Sociology of Migration: Immigrant Integration in the New Immigration Destinations)
- Setsuya FUKUDA "The Changing Gender Relations in Marriage and Fertility in Japan" (Japanese Thematic Sessions: Low Fertility, Rapid Aging Society, and Changing Gender Relations)
- Kana FUSE "Probability and Timing of Having a Second Child in Japan: Does Gender and Characteristics of the First-Born Matter?" (RC41 Sociology of Population: Gender-Related Aspects of Fertility)
- Yoshimi CHITOSE "Geographical Distances Between Adult Children and Parents" (RC31 Sociology of Migration: Roundtable, Migration Studies Part II)
- Saori KAMANO "Changes in Family Forms in Japan: Analyses of Subjective Definitions" (RC06 Family Research: Emerging New Family Forms in Asia and Beyond)
- Saori KAMANO, Takashi KAZAMA, Kazuya KAWAGUCHI, Hitoshi ISHIDA, Takashi YOSHINAKA, and Katsuhiko SUGANUMA "Attitudes toward Non-Normative Sexualities among University Students in Japan: Quantitative Analysis (Part 2)" (RC32 Women in Society: Gender in Sexual Minorities Research: Focus on Asian Scholarship)

(釜野さおり 記)